

モンゴル族におけるオボー祭祀及びその形成 —赤峰市西バーリン旗のボンホン・オボー祭祀の事例を中心として—

エリドンゴク
額尔敦高娃著*ナランビリゲ*訳

I はじめに

モンゴル族におけるオボー祭祀について考察してみたところ、伝統的な慣習の中で非常に普及しながら、その内容や形態に様々な変遷が見られる。オボーは20世紀80年代から内モンゴル全域で復元され、祭礼も復活されている。しかし、各地域のオボー祭祀の起源、オボーの呼称、祭礼のプロセス、付随する行事であるナーダムなどの内容や形態に地域差が見られ、オボー祭祀の地域的な特徴が豊かになっている一方である。

従来の研究状況から見ると、バーリン (Barin) ・モンゴルのオボー祭祀については主に種類、特徴、内容、祭礼の順序などに関する紹介が主たる課題とされてきたのであり、起源や変遷についての考察はあまり見られない。本稿ではバーリン・モンゴルのボムト村のボンホン・オボー祭祀の事例を取り上げ、オボー及びその祭礼の古くからの有様、変遷、特徴などを具体的に記述する。

II オボー祭祀の固有な特徴及びバーリン・モンゴルの中での継続

モンゴル族におけるオボー祭祀に関する特徴は地域により相違が見られるが、モンゴル族の歴史、文化の背景で形成した古くからの伝統的な有様に起源しながら、分流したものである。それらは時の流れに従い、地域の特徴をもつようになったのである。ここでは、従来の研究状況に捉えてきたオボー祭祀における地域差や多様化について見てみよう。

モンゴル人は古くにテングーリを拝み、山水に祈願していたため、地域の人々が集まり、山や丘の頂上、あるいは河川や湖のほとりにオボーを建造し、祭ってきたのである[ロブサンチョイダン 1981:292]。しかし、オボー祭祀は実に山水を祭る慣習の一種であり、継承や変遷から見ると、概ね古くに石や木を積み重ねてノタク・オス (牧草地、所有地、故郷—訳者) を識別する標識や、方向と路線を指す標識にしていた慣習に起源する、と指摘しているのもある[ダムビジャルサン 1998:689]。その他、オボー祭祀については様々な説があり、オボー祭祀は昔のテングーリ祭祀、チングス・カーンのスウルデ (旗) 祭祀に起源し、継承してきたものであり[マンダホ

*著者：中国・内蒙古師範大学蒙古学学院教授・文学博士

*訳者：神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科博士後期課程

他 1997:398]、オボー祭祀はエヘ・ガジャル（大地）、すなわちオドゲン・エヘ（巫女）を祭り、エヘ・ガジャルのエジド・サヒゴルクサン（神霊）を喜ばせるシャーマニズムの内容の一つであるという指摘もある[サイン 1996:83]。

これらの説から見ると、各々の論があり、モンゴル族の伝統的文化や現代的伝承のあり方の背景で見れば成り立つが、概略的な説となり、事例による実証的な分析ではない。例えば、オボーは概ね古くには石や木を積み重ねてノタク・オスを識別する標識や、方向と路線を指す標識であったというのは、『モンゴル民俗探求』に「清朝の時にモンゴル人が遊牧する際、境界線となる山や河川に石を積みたて、標識を作り、これがオボーと呼ばれていた」という記述により、オボーは標識の役割を果たすと論じている。これはオボーの歴史の変遷を実証していない側面が見られる。

聞取りによると、バーリン・モンゴルのオボー祭祀については、次のような伝説があり、この伝説からはバーリン・モンゴルという氏族の形成及び、始祖の出来事とオボーについての関連性が見出される。

「遠い昔、湖のほとりにハダン・バートルという若い牧人が遊牧していた。彼はある日、湖に白雁を狩りに行ったところ、七つの白雁が飛んでいたのが見かけた。しかし、この七つの白雁は湖に下りると、七人の女に変わり、泳いでいた。牧人は射るのをやめ、七人の女の服から一つを取り隠し、待っていた。しばらくすると六人の女は服を着て白雁に変わり、飛んでいったが、服を見つからない一人が残ってしまった。若い牧人は女に俗人の服をあげ、暮らし始めた。それから何年も経て、十二人の子どもが生まれたのである。その後、嫁の願い通り、かつて隠していた服を返す。嫁は服を着ると、白雁に変わりかえり、青空へ飛んでいった。夫と十二人の子どもが、後ろからセルジムを供えた（乳、アイラック、馬乳酒を振り、順調を祝う儀礼）。夫は嫁が懐かしく、十二人の子どもは母を偲んで、石を拾い、一人一つずつのオボーを建て、牧人が嫁と会える願いを抱き、十二人の子どもは母と会える願いを抱き毎年その十三オボーを祭り、十二人の子どもが相撲をとらせたため、近隣に遊牧する牧民たちも続々と参加し、地域のオボー祭祀となり、ナーダムを行うようになった」という伝説が伝えてきている[ウルジバヤル 70代]。

この伝説はバーリン部族のトテム信仰とかわる伝説であり、部族の起源と関連しながら、この部族の祖先神を祭っていた祭壇であるオボーは、その遠い昔の母系親族、あるいは巫女の性格をもつ女性の祖先の伝説に遡られる可能性があるのである。

バーリン（巴林）旗（行政区分）のモンゴル族は主に9世紀にモンゴル高原で遊牧していたバーリン部とホンギラド部の後裔からなり、後の清朝の時、皇女に連れられてきた満州人のモンゴル化された人たちもある[ナ・ボインヘシク 1999:4]。したがって、バーリン・モンゴルはモンゴル族の一つの部族として、氏族起源伝説をもつようになった9世紀、あるいはより前の時代から、氏族の起源やオボー祭祀と何らかの関連性をもつように語られてきている。しかし、現代には様々な変遷が起り、わけが分かりにくくなっているが、無文字で、口承で歴史を次世代

に伝える慣習に従い、伝説でさえ見出される原型を伝説でさえ伝えているのである。

とりわけ、モンゴル族のオボー祭祀を、バーリン・モンゴルのオボー祭祀の事例から見ると、従来の説には、概略的に論述していることが明白に見られるが、具体的な事例で考察する際、オボー及び氏族の形成や祖先にかかわる出来事と関連性をもち、古くから伝えてきている側面が窺われる。オボーは古くから氏族共同体で氏族の神を祭る築壇になっていたからである。

Ⅲ オボーの種類及びその意味合い

モンゴル族におけるオボー祭祀は統括して言わず、地域や部族によると、名づけ、特徴、意味合い、祭り日などが異なる。次には、バーリン地域のオボーの事例を取り上げ、名づけ、特徴、意味合いについて具体的に記述する。

まずバーリン地域のオボーの種類について見てみよう。

バーリン地域のオボーの歴史は長いが、基本的にバーリン・モンゴルのいくつかのオボーの中で、早く建造されたと見られているオボーはバーリン旗の八代親王バトの時代から祭ってきたバルダム・ハラ山のオボーと、サイハン・ハン山のオボー二つである [ムルスン 1994:361]。その他、また現在バーリン地域で祭られているオボーは、それぞれイスン (九)・オボー、アルバン・ゴルバン (一三)・オボー、タリン (平原)・オボー、ガジャル (大地)・オボー、ガチョギン (地名)・オボー、ジャンジョン (軍人)・オボー、メンデン (安寧)・オボー、シトゲン (精霊)・オボー、チェンデモニ (人名)・オボー、ダルチン・ボムブリン (地名)・オボー、マルチン・ボムブリン (地名)・オボー、テビン (五十)・オボー、ハルジン (斑)・オボー、デル・ホラヒン (集会)・オボー、タマギン (烙印)・オボー、ダルハン山のオボー、ミンジャル (人名)・オボーなどがある。この中で、それぞれ建造された数により名づけているオボー、つまりイスン (九)・オボー、アルバン・ゴルバン (一三)・オボー、テビン (五十)・オボーなど、また意味合いにより名づけているオボー、つまりジャンジョン (軍人)・オボー、メンデン (安寧)・オボー、シトゲン (精霊)・オボー、デル・ホラヒン (集会)・オボー、タマギン (烙印)・オボーなど、地名で名づけているオボー、つまりガチョギン・オボー、ダルハン山のオボー、人名で名づけているオボー、つまりガチェンデモニ (人名)・オボーなどがある。またチベット仏教と関連している、すなわち名づけからチベット仏教的な特徴が見出されるオボー、つまりラミン (ラマ僧)・オボー、ボクデン (ラマ僧の爵位)・オボー、ゲゲン (ラマ僧の爵位)・オボー、マニテン (チベット仏教の経文)・オボー、エルニン・オボー、マルデン・オボーなどがある。バーリン地域の有名な四つの山、すなわちバイン・ハン山、サイハン・ハン山、アチト・ハン山、バトバイ山の頂でそれぞれオボーを建造して祭っていて、[スルプンガ 1987:44]その山の名前で名づけたオボーもある。

これらのオボーの名づけ、意味合い、形態に微妙な違いが見られるが、真中に木を立て、回りに石を積み重ね、頂にボルガス (柳条) を挿して円錐体で建造されている造営物であるという

面だけが似ている。

上述したオボーの名づけから窺えるように、オボーは殆んど祭るオボーであるが、機能によって、河川や湖の神を祭るチャガン（清潔）・オボーとあり、部族や氏族のために殉死したバートル（英雄）を記念し、英霊を棲ませるために祭っているジャンジョン（軍人）・オボーやメンデン（安寧）・オボーともあり、方向の標識の役割を果たす他、旅の人々は馬を降りて、石を足し祈願する旅の神を祭るガチョギン（地名）・オボーなど、オボーに宿る神の細分化的な変遷が見られる。

モンゴル地方のオボーは建てられた数がほとんど一、三、五、七、九、一三、一九、二一のような奇数であり、モンゴル族の数字に見られる文化、すなわち奇数は吉の象徴と見なす伝統が表れており、しかもこの伝統はモンゴル人の日常の生活の中で浸透しているにもかかわらず、口承で伝えられてきた叙事詩や伝説に具現されている。例えば、英雄叙事詩『ジャンガル』（江格尔）に「三年奔る距離を/三ヶ月で縮めて/三ヶ月奔る距離を/三日間で縮める」[『一三卷ジャンガル』 1958:221]早馬に乗る英雄の形象が描写されており、「三」という数字及び年月日の数え方と巧みに合わせている動態的な使い方が見られる他、また伝統的な文化を比喻で伝えている。白色は乳の色と関連し、吉色と見なされてきている伝統は、既述したバーリン・モンゴルのオボーの起原伝説に具現され、白雁が部族を生まれる氏族の源、すなわち祖先となり、白雁のテングーリ（天）に戻る、ある意味で言える「彼岸にいった」時に乳を注ぎ、行き先の吉を象徴し願って、部族、伝統文化、オボーという三つの間に繋がってきたことを解明するにいったのである。

モンゴル族においては、民俗慣習は信仰、年中行事、説話、行動など生存や生業と関わるあらゆる現象に象徴的な意味合いを添え、口承で伝わってきたにもかかわらず、バーリン・モンゴルのオボーの起原伝説のように氏族の創始、オボー祭祀、氏族の形成などと繋がって物語られ、オボー祭祀の祈祷文にも唱えられることがある。

IV ポンホン・オボー祭祀の実態

次にはボンホン・オボーの祭礼の実態について記述し、その特徴を見てみよう[写真1・2を参照]。ボンホン・オボーの祭礼の順序は基本的に祭礼の準備、祭礼、オボン・ナイル（Nair、オボー祭祀には付随する行事として行われるナーダムを指し、相撲・競馬・弓射という三つの内容で行われる男の三種競技である一訳者）という三つの内容で行われる。

ボンホン・オボー祭祀には、職掌者ダーマルが担って司祭し、ゲル（パオ）、供物、参拝者たちのもてなしなどを準備し、その費用が奉納による「オボン・スルク」（「オボン・サン」とも呼ばれ、オボーに属する所有品という意味で、奉納による羊、山羊、お茶、お酒、乳製品などを指す）から出るほか、オボン・ナイルでの優勝者に授与するマル（mal、家畜の意味で、賞品に用いる一訳者）もオボン・スルクから出る。

準備ができてから、続いてオポーを修復する儀式が行なわれる。オポーに石を積み足し、ボ
ルガスを取り替えて、ヒーモリ（ヒーモリとは直訳すれば、気の馬であるが、気運、威勢、元
氣などを意味する）ダルチャク（Darč ak、絹切り）を揚げ、祭礼が始まる準備を十分に整えて
おく。

その時から地域の老若男女は続々とやってきて、アイラック(Airaku、乳を酸化させたら、豆
腐のような酸化した脱脂乳になり、それを鉄鍋で加熱すれば、液体と凝固したものとの二つに
分けられて、その酸味の液体をアイラックと呼ぶ一訳者)や乳酒、ホロード (Qoru-du、チーズ、
アイラックと分けられてきた凝固した乾酪素を乾燥させたらホロードになる一訳者)、シュース
(š igüsü、ヒツジを屠って、皮を剥き、内臓を取ってから、丸ごとで鍋に煮たヒツジの丸煮一訳
者)、ボールスク (小麦粉で作られた自家製の食料品一訳者)などを携えてきて、オポーに降臨
するエジド・オンゴド (神霊)、ノタクのナブドク・シャブドク (Nbudok š ibudak、風水の神一訳
者)に捧げ、厄除け、安寧、家畜の繁殖、雨乞いなどを祈願する。続いて、時計回りにオポー
を三回回り、ホレイをもらい (三回繰り返す掛け声で招福する願いを意味する一訳者)、祭礼を
終わらせる。

その供物の中で、シュースの数は九、あるいは二五という数で決まっており、古くからの伝
統であり、これが「オーラク・ホルガを捧げる儀礼」(オーラク・ホルガは二歳のヒツジを指し、
それでヒツジの丸煮を作り、オポーに捧げる一訳者)とも呼ばれるのである。

最後にオボン・ナイルが催される。ボンボン・オポー祭祀では、相撲と競馬が行われるほか、
子どもの陸上競技も行われる。それでオボン・ナイルの力士の技と強さ、競馬のダイナミックな
演技を鑑賞し、子どもの陸上競技の賑やかに楽しめるにもかかわらず、オポーで集まってくる
人々は久しぶりの出逢いの気持ちを交流し、互いの清祥あきなを祈る。近年、小範囲の商いも見られ、
果物、ビール、蕎麦などを売っている人も出てきている。

相撲と競馬に優勝した三名に馬と羊を授け、参加した選手たちに記念品としてハダク (青色
と白色の細長い形の絹切りで作られたもの一訳者)と磚茶zhuan chaを授ける。子どもに文部用
具を授けるのである。

祭礼とオボン・ナイルが終わってから、参拝者たちがオボン・ボダー (祭礼は始まる前で既に
作っていたもてなしを指し、骨付き肉を煮たスープでお米をゆでたモンゴル粥、骨付き肉、バ
ター茶など一訳者)をご馳走になって、オボン・ケシクObokan keš ik (エジド・オンゴドに浄化し
てもらった幸や恵の意味で、骨付き肉、ホロード、ボールスクなどを指す一訳者)をもらって、
持ち帰り、オポー祭祀に参加できなかった家族に食べさせ、一年間の健勝によいという願いを
満たすのである。

オポーには禁忌があり、オポーに登ることや女性のオポーに近づいて祈願することが禁じら
れる。

V むすび

バーリン・モンゴルでは、オポー祭祀とオボン・ナイルが行われる際、復活以来、古くからの伝統的習慣に従い、供物や賞品を地域の家計がよい世帯は自ら負担する自覚性が見られ、伝統的習慣の継続の意味合いを認知している。一方では、オポー祭祀はモンゴル族の歴史の影響で変遷が起こってきている。一言で言えば、参加者にとっては信仰的伝統を重視してきた慣習が退化し、オボン・ナイルの娯楽性に傾くようになっている。というのは、オポー祭祀に行くとき、ほとんどの人が「オポーに参拝する」といつてきた言葉でさえ変化が見受けられ、「オボン・ナイルに参加する」や「オボン・ナイルは行うから行こうよ」と表現しているのであり、現代的な言い方になっている。

参考文献

- 『十三卷ジャンガル』 1958 内蒙古人民出版社
スルプンガ 1987 『巴林民俗探求』 内蒙古人民出版社
ダムビジャルサン 1998 『蒙古民俗学』 遼寧民族出版社
ナ・ポインヘシク 1999 『巴林民俗』 内蒙古人民出版社
マングダホ他 1997 『蒙古民族故事』 内蒙古教育出版社
サイン 1996 『蒙古民俗学』 北京民族出版社



写真1：著者と赤峰市西バーリン旗のボンホン・オポー



写真2：赤峰市ケシクデン旗のホショー・オポー